

人間環境学コロキウムのねらいと実践

丸野俊一・富田英司（人間環境学研究院・学府）

はじめに

人間環境学府の教育目標は、ますます複雑に多様化する傾向にある人間環境を取りまく諸問題を多面的視点から科学的に解明し、人間にとって最適な環境のあり方とその創造の方向を探り、新時代の共生社会をリードする役割を果たす幅広い高度の知識やスキルや問題解決能力を有する高度専門職業人や研究者を育成することである。そのためには、人間そのものを科学する領域と人間を取り巻く環境を科学する領域とそれら両者の関係を科学する領域を個々バラバラに研究教育するのではなく、3者の有機的連携を図りながら人間と環境とを一体的にとらえて研究教育していかねばならない。

しかし、こうした教育目標の達成には、教育カリキュラムの充実や教官サイドの技量の向上や学生の探求心やモチベーションのみが個々バラバラに点在し機能しても十分ではなく、研究教育環境そのものが、学問追求の学びの場として、知的にも精神的にも一体化し、生き活きとしたエネルギーを内在化していることが極めて重要である。すなわち、研究教育環境を構成するあらゆる要素が有機的に融合し、緊張関係の中にもよりよいものを創造していこうとする精神的風土や学びの場が、教官相互の間、教官と学生との間、学生と学生との間にできあがり、実際に機能していることが何よりも大切である。その学びの場は、個々の専門領域内はもちろんのこと専門領域を越えて、必要に応じて臨機応変に組織編成され活動できるように、「柔軟さ」と「自由度」と「創造性」を兼ね備えていなければならない。

人間環境学府では、こうした精神のもとに、平成12年4月からシリーズ「人間環境学」¹と称して、学内教官による「人間環境学コロキウム」と学外講師を招聘しての「人間環境学コロキウム」を立ち上げている。学内教官による「人間環境学コロキウム」は、12年度は試行錯誤的なニュアンスが強かったが、13年度から準必修科目として、人間環境学府の院生全員に受講させるようになった。本稿では、12年度から実施している学外講師を招聘しての「人間環境学コロキウム」の取り組みないしは実施過程を報告するが、その中でも特に14年度に開催した学生主体による内容を重点的に報告し、大学院教育の在り方についての考察を加えることにする。

人間環境学コロキウムの導入と展開

1) 人間環境学コロキウムの企画趣旨

近年、大学の研究者を取り巻く環境は大きく変わりつつある。例えば、高度情報化や経済のグローバル化に起因する現代的な問題や環境問題などに対処するために、研究者には、特定領域の専門家としての知識や技術だけでなく、産学官の連携や学際的研究など、問題を超領域的に捉え、対処していくことが求められている。また、現在進められている大学改革では、国際競争力の高い「知の創造と継承の拠点」としての大学のあり方が模索されてきており、文部科学省の21世紀COEプログラムに代表され

¹ シリーズ「人間環境学」は、できるだけ学際的な研究分野のテーマを幅広く大学院生に教育しようという目的で、当時の人間環境学研究院長（竹下輝和）のもとにスタートしたものである。学内講師による「人間環境学コロキウム」は各コースから一名の講師を教務委員会で選出するが、学外講師による「人間環境学コロキウム」は企画専門委員会（当時の委員長：丸野俊一）の下部組織である「学生実行委員会」の主体性のもとに実施されるようなシステムになっている。

るように、より優れた研究教育拠点への優先的な予算配分がこれから一層浸透していくものと思われる。このような状況で、研究者個人には、これまでよりも高い専門的能力を身に付けると共に、潜在的に高い価値を持つ研究テーマを自ら開拓し、独自に発展させていく批判的・創造的能力が求められている。そのため、大学院教育では、将来の学問や産業界を担っていく大学院生に、如何にしたら、従来の価値・規範に囚われず、発展可能性の高い独創的な研究テーマを主体的に発見し、開拓していく創造的思考や独創性を培うことができるか、個性的かつ特徴あるユニークなカリキュラムや教授法や学習環境作りの開発が一層求められていると言える。

しかし、発展可能性の高い独創的な研究テーマの発見・開拓は創造的なプロセスであるために、大学院生に、直接、ハウツーを教授したとしても簡単に身につくようなものではない。それらは、従来の知見を現実文脈に照らし合わせながら、新たな視点から根本的に問い直し吟味検討すると同時に、時代の動向を先読みしながら、ねばり強く長期的な展望にたって、実際のアクションをベースにしながら努力し続ける取り組みによってはじめて達成されうるものである。それだけに、大学院での正規の授業や論文作成に関する指導を通じてだけでは、大学院生はなかなか自分のものにすることができないかもしれない。また、日常的に研究者が持っている興味・関心や素朴な洞察が、大成された研究に繋がっていくプロセスは、テキストや研究論文に掲載されることのないインフォーマルな個人活動やコミュニケーションに支えられている。そのために、大学院生がそのようなプロセスを体験・学習するには、多くの場合、そのただ中に自らを投げ入れ、手探りを続けるしか近道がない。だが、何事においてもそうであるが、同じ道に先に歩みを進めた先達に触れ、素朴な疑問をぶついたり、意見を求めたりすることを通して、創造的なプロセスの手がかりや苦しみや感動などについて学べることは少なくない。いや、むしろ、大学院生が、まったく柵のない自由な雰囲気の中で、その道の第一線の研究者や専門家と膝を交えながら、真剣に素朴な疑問を発するような学びの場を作ることができ、その中に自ら身を投じることができれば、そうした学びの場こそが、彼らにとって「独創的な研究を展開していく上で必要なものは何か」を肌でひしひしと感じ取ることのできる近道の一つではないかと言える。

「人間環境コロキウム」を立ち上げた第一の理由は、まさにこの「第一線の研究者と膝を交えて、対話しながら、創造的な発見プロセスを肌で感じ取ることのできるような学びの場」を作りたいということであった。

第二の理由は、自分の専門領域の第一線の研究者や専門家が何処に所属し、どのような研究を手がけているかを、常日頃から、大学院生諸君に見極めるような力と努力を是非とも体得して欲しいというねらいからである。このねらいを達成するために、実際には、院生諸君に「自分の研究領域・分野における第一線の研究者や専門家は何処の誰であるか」を識別させ、互いに議論しあいながら、最終的に決定し、招聘し、一緒に対話させる実体験を行わせることが必要である。まず、その院生同士の議論過程の中で、大学院生は、一流の研究者の技能や知識を評価する基準やものさしの多様さを認識したり、ときには自分の基準やものさしの曖昧さを認識したりする。が、その体験は、「本物とは何か」を判断・評価するときの分析力を体得していく上での貴重な体験となる。さらには、講師候補者を選択するにあたり、一流の研究者や専門家をいろいろな角度から吟味評価するというプロセスを経ることやそこでのものさしを一つの鏡にして、自分自身を反省し、自分の研究の独自性や創造性を正しく評価・認識できるようになるかもしれない。それだけでなく、国内外に広く視野を広げて、何処にどのような人材がいるか、この領域では何処のどの研究者や研究グループがユニークであるかを客観的に評価できる眼や判断

力を身につけることも、結果的には期待できる。一流の研究者になるためには、こうした能力の習得も強く望まれるところである。「ぬるま湯の中では創造的なものは生まれない。創造的なものを生み出すためには、いい意味での競争的意識の活性化が重要であり、常に、自分の身をその中に投げ、前向きに努力することが大切だ」という認識を育ませる為の一つの重要な方策を企画したというわけである。

第三の理由は、最終的に招聘するようになった講師とのやり取りを実体験させることによって、まったく価値観や文化の異なる見知らぬ人との間のコミュニケーション能力やネゴシエーション能力を身につけさせようと言うねらいからである。今の若者は、趣味や価値観や生き方や考え方が類似している者同士の間では、コミュニケーションできたとしても、それらが大きく異なる者同士とのコミュニケーションは避けたがると言われている。これでは、今後、ますます進展する国際化社会の中で予想される状況、すなわち異文化の者同士が一堂に会して自分の考えを強く正しく主張したり、相手を説得するような状況で、創造的に問題解決することもできないし、自己の存在を他者に認識させることもできない。実際に、いま大手企業や社会が、21世紀の大学教育の中に最も強く期待している能力の一つが、この創造的なディスカッション能力の育成である（丸野、2002、九州大学、2001）。国際人として第一線で活躍していくためには、自分なりの考えをしっかりと持ち、価値観や文化の異なる人との間で創造的にディスカッションしていく技能や態度を習得していかなければならないというわけである。その実践の場を踏ませたい、体験させたいというのが、企画主旨の一つのねらいであった。

第四の理由は、企画立案能力とその企画立案したものを実際に実践していくときのマネージ能力を実体験を通して育成させたいということであった。学府の教育目標の一つに、アクションリサーチを中心にした実践科学に支えられた創造性豊かなグランドデザイン能力の育成や異なる文化や価値観や考えを持つ人との間でのコラボレーション能力の育成が唱われているが、それは、院生自らが行動主として、能動的に動いてみて初めて体得されていくものである。教官サイドで設定したカリキュラムや指導プラン通りに、大学院生が受け身的に動いている限りは、「『動かされる』、『生かされる』、『考えさせられる』」ということはあっても、『動いている』、『生きている』、『考えている』といった実感もなく、創造的思考もなかなか活性化し難いし、新しいものもなかなか生まれない。自分たちが企画したプランを自分たちの力で動かしていく過程の中での、『迷い』、『ゆらぎ』、『つまずき』体験の中にこそ、真の意味での教育力が秘められている。学生が、その力の大きさや重要性に気づき、自分のあるべき姿を自己発見しながら新たなものを創出していくには、専門や価値観や考え方の異なる者が一緒に協同構成する中で企画立案し、まずは動いてみることである。「新たな認識の起源は他者との中に開かれており、しかも、その起源は動きの中に立ち現れてくるものである」ことを実感して欲しいというわけである。

「人間環境学コロキウム」を企画した主な趣旨は、こうした4つの側面のひとつだけでも、大学院生があるいはまた教官自身が、それぞれの過程で、体得してくれればと言う教育的な配慮ないしは願いからである。

2) コロキウムを実施する上の大学院生の役割

学外講師を招聘しての「人間環境学コロキウム」は、後期に予定し実施しているが、企画立案の段階から実施するまでの過程において、大学院生が果たさねばならない役割は次の通りである。まず、人間環境学府の5専攻、11コースから選ばれた16名の博士後期課程の大学院生からなる人間環境学コロキウム実行委員会が4月から5月にかけて構成される。その実行委員会のもとに、各コースから、第一線の学外講師候補者を数名選出し、その中から何処の誰が適切であるか、様々な角度から議論し決定す

る。各コースから一名の最終候補者が決定すると、次には予算との関係で、当年度に実施したいコースを5~6コースに絞り込む会議を行う。最終的に絞り込まれたコースからの候補者が決まると、そのコースの代表者である院生が、候補者との日程調整やテーマ設定等に関するネゴシエーションを開始する。個々の講師のテーマや日程が決まると、全体の実施計画を立て(少なくとも9月までに)、11コース全体の院生にプログラムを配布し、できるだけ多くの院生がコロキウムに出席し議論の場に参加するように周知徹底を図る。コロキウムの開催当日は、そのコースの実行委員が司会進行係を務める。コロキウムには、大学院生のみでなく、教官も一緒に参加し、講師との間で議論を展開する。このように企画立案から実施に至るまで、全て大学院生主導のもとに行われるが、その間、必要に応じて教官組織による企画専門委員会のメンバーからのアドバイスを受けることもできる。

3) 平成12・13年度の「人間環境学コロキウム」実施過程での問題点

平成12,13年度に実施した学外講師による「人間環境学コロキウム」の講師名とテーマは表1の通りである。しかし、この最初の2年間に行われた「人間環境学コロキウム」の実施過程には、次のような所に問題があり、十分に立ち上げの趣旨が活かされたとは言い難い。

第一に、企画立案から実施に至るまでの過程において、実際には学生同士が議論しあいながら進めたのであるが、最終的な講師陣の決定場面などでは教官スタッフのアドバイスが大きく影響した可能性がある。その意味では、院生達が本質的に自分たちだけで講師陣を判断評価し、決定したというよりも、自分たちが候補者としてあげた講師陣を教官スタッフとのやり取りの中で決定したことになり、『原因主体の認識』を実感するまでには至らなかったといえる。なぜなら、教官スタッフと大学院生間の交流では、世代の違いや立場の違いから、教官から学生が「聞き取り、感じ取る」ことが中心になってしまいがちであり、自分たちが完全に決定権ないしは主導権を握ることができなかった。加えて、ここで学外講師として招聘する研究者を教授陣が選定してしまえば、コロキウムの意義自体が薄れてしまう。なぜなら、現在の教官は、既に確立した研究者であるため、従来の研究体系にどうしても縛られがちになることから免れ得ず、講師の選定にも自ずとフィルターがかかってしまうと同時に、コロキウムというイベントそのものが大学院生へのお仕着せとなってしまう恐れがあるからである。

この問題点を解消するためには、世代的にも近く、新たな研究の地平を開拓する過程のただ中にも関わらず、既に大学院生よりも研究を進めてきた新進気鋭の研究者を自分たちの意志決定のもとに迎え入れ、将来の自分たちの姿をそこに投影することのできる知的対話交流の機会を自分たちで作り上げていくようにしなければならない。その意味では、「コロキウム」の実施運営に当たっては、学生実行委員会に全てを任せて、その上部組織である教官組織からなる企画専門委員会 は彼らから一定の距離を置いて、彼らの運営のあり方を暖かく見守るスタンスを取るようにすることが不可欠である。そのような枠組みの中で、もし大学院生がある程度自らの裁量で、注目に値する活躍を見せている若手研究者を探し出すことができ、彼らなりに自己満足できるような運営ができるならば、それ自体が研究の価値を見定める能力を養うよりよい契機に成りうる。

第二には、「人間環境学コロキウム」そのもののあり方である。平成12,13年度の間環境学コロキウムは、人間環境学に関連する各学問領域のホットなトピックについて、毎回一名の新進気鋭の講師を迎え、講演並びにそれについての質疑応答を行う形で行われた。このような形式での研究会は、特定の領域における知識獲得と相互交流という点に関しては効果的であったが、人間環境の様々な側面を複眼的に捉えた、学際領域としての人間環境学の構築という点から、また新たな研究領域の展開という点か

らすると十分なものであったとは言えない。ともすれば私たちは、自分の慣れ親しんだ研究領域にだけ注意を払い、自分の研究に新たな展開をもたらす可能性のある、他の研究領域の動向にまで注意を向けられない傾向にあるが、前年度までのコロキウム形式では、その傾向を助長する可能性があるのではないかと反省させられた。

・平成 14 年度の間環境学コロキウム

平成 14 年度の間環境学コロキウムは、人間環境学府の 5 専攻、11 コースから選ばれた 16 名の博士後期課程の大学院生から成る人間環境学コロキウム実行委員会が、都市・建築学部門の渡邊教官（企画専門委員会委員長）、古賀教官、志賀教官の協力を得て、2002 年の 10 月から 3 か月間に渡り、全 3 回の日程で実施された。ここでは、まず今回のコロキウム全体の基調となったテーマが決められた経緯について触れた後、3 回のコロキウムの具体的な企画、及び開催当日の概況²について述べる。続いて、今年度の企画・運営について特に工夫した点について述べ、最後に、今後の人間環境学コロキウムに向けての課題について考察を行う。

1) テーマ「人間環境学をめぐる対話：対話の輪を広げる」について

昨年度までのように、人間環境学府の各コースのいずれかに特に関係の深いテーマについての講演が何度か行われるといった形式で行われるとすれば、人間環境コロキウムそのものが、いろいろな視点からいろいろな知を融合しながら、しかも互いに『並び合いの関係』に立ち、真の意味で新たな領域を開拓・創出していくための『知的創出の場』にはなり難い。人間環境学という生まれたばかりの研究領域が、今後発展し、定着していくためには、例えば「人間環境とは何か」といった、人間環境学の下位領域間で、おそらく簡単には一致した見解が得られないであろうテーマについて、複数の異なる下位領域に属する大学院生並びに教官が肩を並べて日常の言葉で議論するような場、つまり文字通りの意味での“colloquium”が必要であろう。このような問題意識に基づき、平成 14 年度のテーマ「人間環境学をめぐる対話：対話の輪を広げる」が掲げられた。この「対話」は、第 1 に、異領域間での対話を意味しているが、それだけではない。異領域間での対話では、ある領域の専門家でも、他の領域では初心者同然であることが多く、特に最初の時点では高度に専門的な内容について深く詰めていくことは難しい。従って、異領域間での対話は、その始まりにおいては誰でも参加できるという門戸の広さが必要になってくる。今回の人間環境学コロキウムでは、領域間の対話の輪が広がっていくことを「横の広がり」、専門的な知識を持つ者からそうでない者までといった対話の輪の広がりを「縦の広がり」として、これら 2 つの意味で対話の輪の広がりを促すための会を企画した。

2) 概況の報告

(1). 第 1 回「人間と環境の関係：あなたの考える『開発』と『発展』とは」

第 1 回企画は、10 月 26 日に「人間と環境の関係：あなたの考える『開発』と『発展』とは」というテーマのもと、工学部建築学科本館 1 階第 3 講義室にて行われた。本企画を中心的に進めたのは、空間

² ここでは、開催当日の概況についてのみ紹介する。プレゼンテーション及び議論の詳しい内容については、今後、出版予定の刊行物を待たたい。

システム専攻建築計画コースの友枝竜一氏であった³。第1回企画は、テーマとの関連では、「横の広がり」に重点を置き、次のようなコンセプトを持っていた：「近年の環境問題を巡る議論の中には、人間が幸福を追求するための『開発』が本当に人間社会の『発展』に結びつくのかという、より根元的な問いが含まれている。開発と発展を巡る様々な問題は、人間と環境の関係性のあり方を問う人間環境学の中心的課題の一つである。この企画では文化人類学、環境社会学、環境心理学からの研究紹介をたたき台として、他分野の院生がそれぞれの立場から『開発』と『発展』の捉え方について議論し、人間環境に対する認識の違いを浮き彫りにしていく。この試みは、人間環境学全体の理論的基盤となる『人間環境哲学』とも言うべきメタ理論の構築に繋がるものであろう。」

パネリストとしては、文化人類学から、比較社会文化学府、博士後期課程の片岡樹氏、環境社会学から、東北大学大学院文学研究科、博士後期課程の帯谷博明氏、環境心理学から、九州龍谷大学非常勤講師の呉宣児氏を招き、会の前半は、パネリストが自身の研究成果の一部を紹介し、それらに基づいて「開発」と「発展」をどう捉えるかそれぞれの見方が発表された。プレゼンテーションは、帯谷氏が「日本の河川政策と環境運動の展開：ダム開発を例に」、片岡氏が「環境主義・民族主義・『もうひとつの知』：現代タイ国における『森に生きる山地民の知恵』再評価運動にみる文化と政治」、呉氏が「地域における共同性をどう捉えるか：『原風景語り』をとおして『参加』の意味を考える」というタイトルで行われた。後半では、企画担当の友枝氏による司会進行のもと、オーディエンスからパネリストへの質問や意見、パネリストとオーディエンスを巻き込んだ議論を行った。コロキウム委員を除いて、30余名の大学院生並びに教官の方々の参加があり、後半では、10名以上のオーディエンスが積極的に発言し、終了予定時刻を過ぎても、なお盛んに意見が交わされた。また、参加者の内訳については、行動システム専攻から約9名、空間システム専攻から約5名、都市共生デザイン専攻から約5名、人間共生システム専攻から約3名、発達・社会システム専攻から約3名、他の参加者には人文科学府、生物資源環境科学府といった学府外からの参加もあり、第1回企画に、多くの研究領域にまたがる方々の参加を得られたことが分かる。

(2). 第2回「人間環境としての『道』のこれから」

第2回企画は、11月13日に「人間環境としての『道』のこれから」というテーマのもと、箱崎理系キャンパス内の21世紀交流プラザにある、カルチャーカフェにて行われた。本企画を中心的に進めたのは、都市共生デザイン専攻アーバンデザイン学コースの阪本英二氏であった。第1回企画は、テーマとの関連では、「縦の広がり」に特に重点を置き、次のようなコンセプトを持っていた：「今日、道路開発・計画の見直しが大きな議論を呼んでいるが、この問題は採算性の問題だけではなく人間環境の問題でもある。今『道』のあり方が見直されることは、われわれのまちや生活にとってどのような意味をもっているのだろうか。本企画では、様々な専門性を備えた人間環境学府が『道』について一体どのような知見を提示しうるのかを、専門にとらわれない、ざっくばらんな議論を通して模索する。」

パネリストには、地域社会学から小川全夫教授（人間科学部門）、都市計画学から出口敦助教授（都市・建築学部門）、臨床心理学から野島一彦教授（人間科学部門）を迎え、司会は企画担当の阪本氏が担当した。まず、小川氏から「道の駅：その発想から制度まで」、出口氏から「都市空間としての『道』

³ 本文中で紹介された方について、所属学府・研究が省略されている場合は、九州大学大学院人間環境学府・研究院に所属していることを示す。

から人間環境としての『道』へ」というタイトルでそれぞれプレゼンテーションをして頂いた。その後、野島氏からのコメントという形で、パネルディスカッションを始めた。そして最後に、質疑応答の時間が設けられた。堅苦しさを感じさせないカフェで、コーヒーを飲みながら参加することができるという環境要因に加えて、特にテーマを絞らず自由な発想でパネルディスカッションを行うことによって、誰もが気軽に参加できる「縦の広がり」を感じさせる雰囲気を作り出すことができた。加えて、カフェを敢えて貸し切りにせず、テーブルと椅子の予約という形で会を実施したことで、当日たまたま会場に居合わせた方々の中には最後まで参加して頂いた方も多くいた。かつて、芸術が「美術館に閉じた芸術」から「日常生活に密接した芸術」を目指し、ハプニングアートという一形態を生み出したのと同様に、学問における対話に「縦の広がり」を求めるならば、「ハプニング・アカデミー」とでも呼べる本企画のような形態が効果的なものかもしれない。

(3). 第3回「家族の風景：人間環境学から家族の問題について考える」

第3回企画は、12月14日に「家族の風景：人間環境学から家族の問題について考える」というテーマのもと、箱崎文系キャンパス内にある文・教育・人環共同研究棟2F会議室にて行われた。本企画を中心的に進めたのは、人間共生システム専攻心理臨床学コースの本山智敬氏であった。この企画は、次のようなコンセプトを持っていた：「本企画では、人間環境学の中で建築学、臨床心理学の2つの分野から教官や院生の代表が各自の研究の紹介やそれぞれの分野での家族に関する問題意識を伝え合うことを通して、家族（家庭）という環境に関して、分野を越えた『対話』を行うことを目的としている。今回は特に『家族環境と子ども』にスポットを当て、人間環境学が潜在的に持つ、複眼的な観点を通して初めて見えてくる人間環境への新たなアプローチを探る。」

パネリストには、建築計画学からは益田信也氏（近畿大学九州工学部）、竹下輝和教授（都市・建築学部門）、建築学からは空間システム専攻建築計画コース、修士課程の阿部諭香里氏、臨床心理学からは鈴江毅氏（馬場病院、香川県高松市）、人間共生システム専攻心理臨床学コース、博士後期課程の河村照美氏、春日由美氏、ならびに上手幸治氏を迎えた。司会は、前半においては企画担当の本山氏、後半においては富田氏が担当した。まず、前半では、増田氏から「子ども部屋のプライバシー現象の住文化論的考察」、春日氏から「家族・親子・個人：臨床現場から見た家族」というタイトルで、河村氏から家族全体に対する心理療法のアプローチの概観と共に動的家族画法についてのプレゼンテーションがあった。これらについての質疑応答の後に、指定討論者である竹下氏、阿部氏、鈴江氏、上手氏を中心にしたパネルディスカッションを行った。その後、オーディエンスを交えてのフリーディスカッションを行った。ここでも第1回と同様に、時間内に参加者からの意見を十分に引き出すことができないほど多くの発言を頂いた。今後、両領域間のやりとりを何らかの形で続けることにより、新しい研究の展開を予感させるという意味で非常に有意義な会であったと思われる。

3) 企画・運営のプロセス

2002年度の人間環境学コロキウムは、これまで概観してきたように、異領域間での対話を全面的に取り入れたものとなり、「人間環境学をめぐる対話：対話の輪を広げる」というテーマに沿ったイベントにすることができた。このようなイベントを実現するにあたっては、テーマによる目標設定だけではなく、企画・運営の段階における創意・工夫が不可欠である。ここでは、企画・運営がどのように進められていったかについて、主に、コロキウム実行委員会の運営、講師の選定、コロキウム当日の会場設

定や進行方法，広報活動などについて，昨年度までと異なる部分を中心的に紹介したい。

(1). 実行委員会の運営について

人間環境学コロキウム実行委員会は，第1回が行われた6月24日から最後に行われた12月10日までの間に計12回行われた。実行委員会には，多くの場合，コロキウム担当の教官が同席し，コロキウム実施の経緯や基本方針に関しての周知や折々のご指摘・助言，情報提供をして頂いたが，パネリストの選定，コロキウムの企画内容など具体的な内容については実行委員にほとんど任せて頂いた。

委員の役割分担については，従来は，委員長は全体のとりまとめを行い，講師の選定を担当する約6名の委員が，自分の研究分野に相応しい講師の選定，講師との交渉，会場設営，記録，広報をそれぞれ一人のコロキウム委員が全て責任を持っていた。従って，委員長以外の委員は，他の委員とほとんどやりとりする必要はなかった。それに対し，今年の実行委員会では，企画，記録，出版，広報，ウェブの各係を設定し，多くの委員が協同で最初から最後までコロキウムの企画・運営に携わった。企画係は，3回のコロキウムそれぞれの責任者となり，それぞれのテーマ，コンセプト，会場設定，当日の進行を中心的に受け持った。前節で既に紹介した，友枝氏（第1回），阪本氏（第2回），本山氏（第3回）が企画係であった。記録係は，実行委員会の議事録，コロキウム当日の記録を主な業務とし，行動システム専攻健康科学コースの畑山知子氏，安達隆博氏，発達・社会システム専攻社会学コースの李珊氏が担当した。出版係は，人間環境学コロキウムの内容の出版に関わる諸業務を受け持ち，空間システム専攻建築環境学コースの和久田晃子氏，人間共生システム専攻心理臨床学コースの顔俊鴻氏が担当した。広報係は，コロキウム開催の告知，ポスターの製作，会場の案内を受け持ち，都市共生デザイン専攻アーバンデザイン学コースの松本光太郎氏，顔俊鴻氏（出版係と兼任），人間共生システム専攻社会共生システム学コースの衛藤聡美氏，行動システム専攻心理学コースの船橋篤彦氏が担当した。ウェブ係は，発達・社会システム専攻社会学コースの森康司氏が担当した。各委員は，それぞれの担当する係としてだけでなく，委員会で各企画について議論する際には，積極的にアイデアを出し，内容の吟味・検討に加わったと同時に，講師を選定する際にも，多くの委員が関わった。

これらのことから，今年度の人間環境学コロキウムは，準備段階においても，そのテーマどおり，研究領域の異なる大学院生同士，あるいは教官と大学院生の対話の輪を広げながら進んでいったと言える。実行委員会での議論で特に興味深かったのは，互いの研究領域の話をしている時に，例えば社会学特有の方法論であると思っていた調査方法や心理学特有の方法論であると思っていた実験手法が，建築学においても非常にポピュラーな研究方法であるといったことや，互いに共通した理論的背景を持っていることに気づいたことである。このようなことも，今回の人間環境学コロキウムの隠れた成果の一つと言えるだろう。実行委員会で具体的にどのような議論がなされ，どのような気づきが起こったかについては，コロキウムの内容を出版する際に，あわせて紹介したいと考えている。

(2). 講師の選定・招聘について

講師の選定にあたって留意した点は，出来るだけ大学院生のパネリストを含めることであった。この点については，最初の時点で渡辺教官から，人間環境学府内での院生同士の交流を活性化するという目的もあって，修士課程の学生も範囲にいれて大学院生による研究発表を取り入れてほしいという意向が伝えられていた。昨年までは，既に確立した研究者のみを講師として選んでいたため，今年度の人間環境学コロキウムの大きな特徴の一つである。特に，第1回企画については，3名全てのパネリストが大

大学院生であった。加えて、異領域間での対話がテーマとなっていることから、パネリストには2つ以上の研究領域から、2名以上の発表者を迎えた。

(3). 会の進行及び会場設定について

先に述べたように今回のコロキウムでは、複数領域間での対話を促すことが目的であったため、単に複数領域から選ばれたパネリストやオーディエンスが互いに同席しているだけではなく、互いに意見を交えることのできる環境を造る必要があった。そのため、会の進行方法については、従来が講義プラス質疑応答とという形であったのに対し、今年度は全ての回においてフリーディスカッションあるいはパネルディスカッションに、会の半分以上の時間を割いた。つまり、前回までのコロキウムは、講演者からオーディエンスへの知識伝達として機能していたのに対し、今回はプレゼンテーションをきっかけとした話し合いによる相互理解、相互交渉のプロセスを大きく取り入れた。また、ディスカッションの時間を設けるだけでは、オーディエンスからの参加が期待できないかもしれないということから、できるだけ発言しやすい自由な雰囲気を作り出す必要があると考えた。そのために、今回はティータイムを設け、その時間にパネリストと自由に話ができるようにしたり、お茶を飲みながら参加できるようにした。また、会場から机を取り払ったり、パネリストとオーディエンスの距離を出来るだけ縮めたりすることによって、空間的にも自由度の高い場になるよう配慮した。

(4). 広報活動について

前回同様、今回も周知のためにポスターを用いた。ポスターの作製は、志賀教官に紹介して頂いた空間システム専攻建築計画コースの宮田氏に依頼した。Eメールによる周知も、以前から利用されていたが、連絡をより徹底させるために、「広報係 各コロキウム委員 各コースに所属する全大学院生」という形で連絡網を作り、コロキウム実施前に配信した。また、今回から初めて人間環境学府のホームページにリンクさせる形で、人間環境学コロキウムのホームページを製作した。ポスター及びEメールにURLを掲載し、ポスター及びEメールよりも詳しい内容を紹介すると同時に、質問や意見を受け付けるための掲示板も設置した。第3回企画については、パネリストのプレゼンテーション内容を事前に告知し、メーリングリスト上でのプレ・ディスカッションを試験的に行った。ホームページ上での活動は、それほど十分に展開できたとは言えないが、今後の人間環境学コロキウムの発展の礎となることを期待している。

(5). 今後の課題

以上に述べてきたように、今年度の人間環境学コロキウムは、これまで試みられてきていない多くの創意・工夫を盛り込んだものであった。特に、大学院生を中心に企画・運営を進めて、建築学、臨床心理学、社会学、文化人類学、環境心理学を横断する学際的な対話の場を提供し、多くの方が自発的にその対話の輪に参加し、活発な議論を交わすことができたという点は、本企画の最も大きな成果であろう。しかしながら、対話はまだその一歩を歩み始めたに過ぎない。このような対話を今後さらに突き詰めて行き、新たな研究プロジェクトの立ち上げや、人間環境学の新たな展開などにつなげていくことが重要であろう。そのためにも、ここでは今年度の人間環境学コロキウムを終えて明らかになった今後の課題について2点だけ述べておきたい。

第1には、人間環境学コロキウムの内容を、研究に密接なものにしていく必要がある。先ほども述べたように、コロキウムが研究の創発を刺激する場となるためには、優れた研究を既に行っている大学院生や教官の研究成果を紹介し、議論を戦わせるような企画が必要となるだろう。領域間の相互理解が今

後進んで来るにつれて、そういった研究を進展させることを志向したコロキウムの重要性が高まってくると思われる。

第2の課題は、人間環境学コロキウムを人間環境学府・研究院の年中行事として行うだけではなく、大学院生を中心として、インフォーマルな議論を、年間を通して継続的に行っていくことである。これは第1の課題を実現することにも関わってくる。人間環境学コロキウムは、回数・時間も限られているため、その中だけで研究につながるような新たな発見や協同研究のきっかけが生まれることは困難であるし、それぞれの研究領域が持つ背景を深く理解することはできない。従って、人間環境学コロキウムをきっかけとしてできた大学院生同士の繋がりを、研究会などを通じての相互交流に発展させ、お互いの研究に活かしていくことが重要であろう。現在、メーリングリストやウェブを利用して、今年度のコロキウムでの議論を引き継ぐ形で大学院生間のインフォーマルな連携ができるよう準備を進めているところである。

引用文献

- 1) 丸野俊一，2002 自己表現力と創造的・批判的思考を育むディスカッション教育に関する理論的・実践的研究（課題番号：11301004）平成11-13年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)）研究成果報告書
- 2) 九州大学，2001 連続シンポジウム「21世紀の国立大学の役割」

表1 平成12,13年度に実施した学外講師による「人間環境学コロキウム」

講師(所属)	テーマ
(平成12年度)	
蜷川利彦：日本設計九州支社構造設計主任技師	「空間を造る」
仙田満：東京工業大学大学院教授	「子どもの遊び環境デザイン：理論と実践」
室崎益輝：神戸大学教授	「防災からみた都市環境のあり方」
田中千穂子：東京大学大学院助教授	「つくられる関係性：乳幼児心理臨床学からの発想」
井上達夫：東京大学法学部教授	「多元的社会の哲学：共生・対話・合意」
数井みゆき：茨城大学教育学部助教授	「日本人母子愛着の世代間伝達：家族背景および文化的特徴はどう関連するのか」
(平成13年度)	
山下晋司：東京大学大学院総合文化研究科教授	「エコ・ツーリズムのアイロニー：マレーシア・サバ州の現場から」
布野修司：京都大学大学院工学研究科助教授	「すまいにおける豊かさの追求」
柳敏晴：鹿屋体育大学体育学部教授	「人間と自然環境の豊かさ」
小林文人：和光大学人間環境学部教授	「地域の暮らしと学びの豊かさ」
當眞千賀子：国立国語研究所研究員	「社会・文化・歴史と心理の交差：実践をめぐる対話へ向けて」
龍有二：北九州市立大学国際環境工学部教授	「消費する建築から育む建築へ」

注)平成13年度に行われた第2回では、新しく全体のテーマとして「人間環境における『豊かさ』」が設定され、前年度と同様に全6回の講演が行われた。ここでは講演者と講演テーマの紹介にとどめておくが、講演内容とコロキウム当日に行われたやりとりについての詳細は、現在編纂中の出版物に掲載予定であるため、そちらを待たれたい。